



ツツジ

ふみの会 浜口 喜夫

何年か前の春のこと、東京の山手線駒込駅の土手にツツジが美しく咲いていて印象に残りました。駒込のあたりは、江戸時代には藤堂藩の下屋敷がありました。そこに庭師として出入りしていたのが伊藤伊兵衛。藩主の藤堂高久が薩摩からキリシマツツジを運ばせて、花が終わると伊兵衛に捨てさせたのだとか。その捨てられるツツジを伊兵衛が自分の庭で育ててふやしたことから、庭木のツツジが江戸へ、さらに全国へひろがったと言われます。

庭木のツツジから視野をひろげて、ツツジ科の植物全体を見わたしてみると、この仲間は逆境に強い植物だとわかります。たとえば、北アメリカのブルーベリーやイギリスのヒースと呼ばれる荒地のエリカなど、耕作にも牧畜にも不向きな土地に繁茂しているのはツツジ科植物です。日本では火山地帯の、酸性土壌で痩せた土地がツツジ科植物のホームグラウンド。どうやら、肥沃な土と十分な水分に恵まれたところに森林が発達して、そこからはじかれて、荒地を開拓しているのがツツジ科植物だと言えそうです。

ツツジを漢字で書くと「躑躅」（音読みは「て

きちよく」）。足踏みする、動けなくなる、という意味で、本来は「羊躑躅」でした。つまり、羊がツツジをいやがって近づかない、とか、食べると動けなくなる、という意味から出た漢字です。たしかにレンゲツツジなどは有毒成分を含んでいます。逆境を乗り越えて不毛の地にやっと進出してきたのに草食動物に食べられてたまるか、というわけです。ツツジ科のアセビも有毒でしたね。

むかし理科の授業で、植物の根にある根毛という細い毛で、土の隙間から水やミネラルを吸収している、と習いました。でも近年、陸上植物の約8割は菌根菌と共生関係にある、ということがわかってきました。根毛よりももっと細い菌類（カビの仲間）が、水や糖などを根と菌でやり取りして根と共生しているというのです。なかでもツツジ科植物は独特の菌根菌が共生していて、おかげで土が痩せていても、酸性でも、少々乾燥していても、それに耐えて生育できるのだそうです。その菌根菌の名は、エリカにちなんでエリコイド菌根菌と名づけられました。

今年の春は、こんなことを頭の片隅に入れてツツジの花見をしようと思っています。

花をたずねる旅

（「あしかがフラワーパーク」から「ココ・ファーム・ワイナリー」へ）

榎原 英千世

10月21日（月）朝8時に公園協会前駐車場に集まった20名が中型バスに乗り、国道50号、常磐道、北関東自動車道を通って足利ICから、「あしかがフラワーパーク」に向かい10時頃到着。ここは大藤とバラの花に魅せられて春に訪れる人達が多く、秋には少ないと言われていますが、それなりの入場客が来ておられました。アメジスト・セージ、バラ、スイセン、ランタナなどが秋の呼び物の花々で、入場口近くの小さな池とその周りで早速これらの花々を観ることができ、その後もパーク内各所でこれらの花々



を楽しめま

した。春には夜のライトアップに大勢の入場客で賑わうとのこと、その一環で整備されている「フラワーキャッスル」の広い前庭一面に整然と植栽されている白い花々が、すべて電飾された模擬花だとわかり驚きました。

正午前ごろ、市内の北の小高い丘にある「ココ・ファーム・ワイナリー」へ。カフェでのランチ後、カフェのある



建物のすぐ前の急傾斜地（平均斜度38度、頂上辺りでは42度）の山のてっぺんまで広がっている葡萄畑を見上げ



ました。ここで毎年ワイナリーに提供する葡萄を栽培し続けておら



れることに感嘆しないではおられませんでした。中学校の障害者学級の先生と生徒さん達が黙々と開墾を続けられ、葡萄の苗を植えて今に至っているとのことでした。ショップでは当所で醸されたワイ

ンが目玉商品で、メンバーの多くが手にしておられました。

帰途、市内の菓子製造会社の工場直売店に立ち寄り、無料サービスのお茶やコーヒーで大麦を原料とする菓子やケーキを楽しみ、お土産も求めました。午後3時過ぎに当所を発ち途中壬生PAで小休憩後、一路水戸へ午後5時ごろに無事出発地の駐車場に戻り解散となりました。



「花の感謝祭」に参加して

榎原 令子

水戸市植物公園主催の令和6年「花の感謝祭」は例年の4月とは違って、10月14日に開催され、「街を花と緑でいっぱいにする会」（以降、「街花会」）は例年通り参加しました。

暑い暑い夏を過ぎてからの開催に果たしてどんな花苗が集まるのか少々心配していましたが、「街花会」のメンバーの皆さんが自宅で以前から育てていたものや、この日のために育てたものを提供して下さいました。想像以上の種類と数の花苗等が集まりホッとしました。

10月9日から花苗等を公園協会へ持ち込み始め、12日に名付けや値付け、13日に花苗や準備品を植物公園へ持ち込み、10月14日の「花の感謝祭」当日は朝8時半から開店準備を始めました。咲いている花が少なく、苗だけでは彩りが淋しい感じがぬぐえませんでした。

お客様が来られ楽しそうにあれこれ選ばれることがしばらく続きましたが、お昼前には客足も途絶え、思っていたより早く店じまいすることになりました。

花を通してお客様と対話し笑顔にさせていただきながら、「花の感謝祭」が終わりました。

参加された皆様、ご苦労様でした。有難うございました。



講習会報告

笹島 隆治

【第7回しめ飾り作り】

年末恒例になりましたしめ飾り作りが12月26日公園協会にて行われました。参加者10名毎回参加して頂いている方々です。講師は大串貝塚塾塾長 飛田邦夫先生にお願いしています。

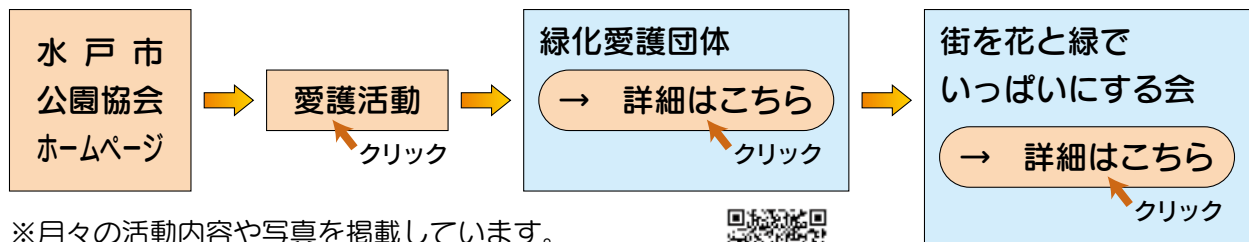
藁は実のなる前に刈り取り保存しておいたものを使います。今回生の橙やウラジオロが手に入らずプラスチックの物ではありましたが皆素晴らしい出来栄でしたよ!!

正月後も丸めた飾りををリースとして玄関先で利用しています。今後も継続してゆきますので参加よろしく願いいたします。



お知らせ

水戸市公園協会のホームページに「街を花と緑でいっぱいにする会」の情報を掲載しています。パソコン・スマホ等で検索してみてください。



※月々の活動内容や写真を掲載しています。

こちらのQRコードを読み込んでご覧いただけます。→



花貫溪谷の自然観察会

茨城生物の会 内山 治男

水戸市公園協会は年3回の自然観察会を県内で実施しています。今年度は大子町奥久慈憩いの森、水戸市七つ洞公園、高萩市花貫溪谷でした。第3回の花貫溪谷自然観察会（11月20日）は急な上り下りがなく歩きやすいコースで、往復40分のコースを3時間ほどかけて歩きました。参加者は3班にわかれ各班に講師がつきました。自然観察会で出会ったおもな植物を紹介します。

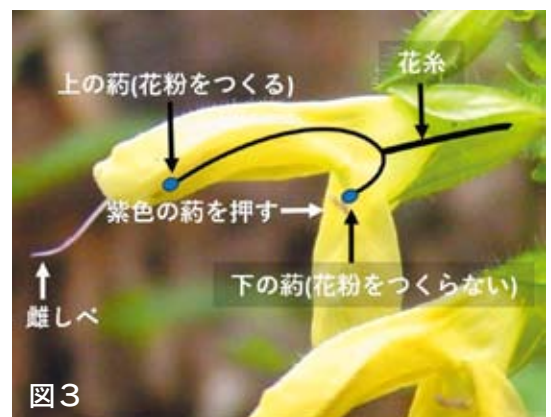
ダンコウバイ（クスノキ科）

県内では県北の山地などに生育する雌雄異株（しゅういしゅ）の落葉低木です。今回は葉の形と枝の匂いを観察しました。葉は先端が3裂していることが多いことや（図1）、落ちていた小枝を折ってビャクダン（白檀）のようなさわやかな香りを嗅ぐことができました。また高級つまようじの材料に使われるクロモジ（クスノキ科）と同じ仲間であることや、3月下旬に木々全体を黄色の小さな花が彩り、遠くから目立つことなどを説明しました（図2）。また参加者からは同じ時期に花をつけるアブラチャン（クスノキ科）との違いについての質問がありました。観察会で植物の匂いを確認したのはコクスギ（ミカン科）、イヌザンショウ（ミカン科）、ミツバ（セリ科）などがあります。



キバナアキギリ（シソ科）

学名は *Salvia nipponica* Miq. です。ブラジル原産のサルビア（*Salvia*）と同じ仲間です。サルビアの長い筒状の花弁を引き抜き口に含むと、花弁の基部が甘いことを体験していると思います。キバナアキギリも花弁の基部に蜜があります。花を見ると雌しべは花の中から長くつき出ているのがわかります。被子植物は雄しべの花糸（花粉をつくり蓄える葯の下にある糸状の柄）の先に普通2個の葯が合わさるようにできています。キバナアキギリの2個の葯は弓の両端のように離ればなれになり上下につきます。上側の葯は花弁に隠れて見えませんが花粉を作ります。下側の葯は紫色で花の入口正面にあり花粉を作りません。訪花したハナバチ類が頭をつっこむと下側の紫色の葯を押すので、花弁に隠れていた上側の葯が遊具のシーソーのように降下し、花粉がハナバチ類の背中につきます。蜜を吸ったハナバチ類は背中の中の花粉を他の花に運び、キバナアキギリの他家受粉を助けます（図3）。つまようじの太さと同じ棒を花の中に挿し込み、下側の紫色の葯を押すと上に隠れていた雄しべの葯が現れる様子を体験してもらいました。植物と昆虫のしたたかさを垣間見たひと時でした。



ツリフネソウ (ツリフネソウ科)

学名は *Impatiens textorii* Miq. です。アフリカ原産のインパチエンス (*Impatiens*) や東南アジア原産のホウセンカもツリフネソウと同じ仲間で、果実に触れて遊んだことがあると思います。種子は果実が割れるときの弾力で飛ばされず (図4)。道端にわずかな花と果実が残っていたので、果実にそっと触れてもらい種子がはじける様子を楽しみました。

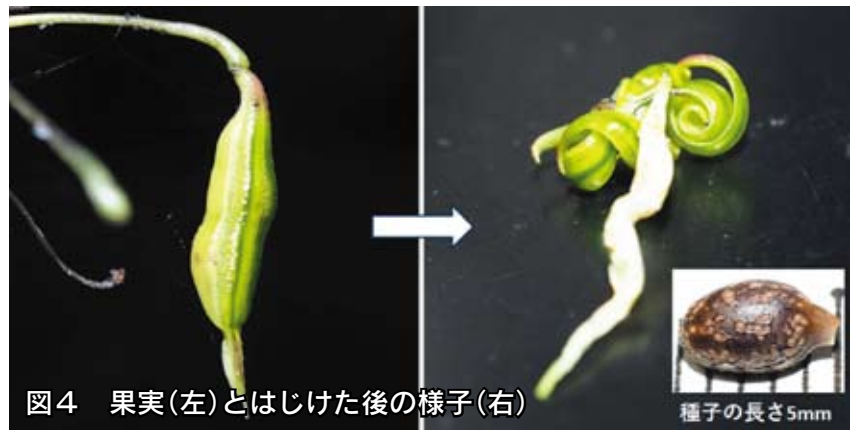


図4 果実(左)とはじけた後の様子(右)

種子の長さ5mm

イロハモミジ (ムクロジ科)

県内のカエデ類は 19 種類確認されていますが (図5)、今回の観察会では9種類を観察することができました (図5の数字に○印は現地で確認)。イロハモミジ (タカオカエデ) の果実 (翼果) はプロペラのような羽をつけていました。(図6)。羽の付け根にある2個の種子を少しでも遠くに拡散しようとする様子を観察しました。また同じような果実をつけたウリハダカエデがありました (図5の①、図6)。ウリハダカエデは葉の形だけを見るとカエデの仲間とは思えないのですが、翼のある果実の様子などでカエデの仲間であることを観察しました。



図6



図5

溪流沿いに紅葉した木々を楽しんでいると、黄色に色づいたタカノツメ (ウコギ科) の大木を最後に見ることができました。紅葉時期なので草本類の花の盛りは過ぎていましたが、それでもシロヨメナ、ヤマハッカ、ハナタデ、ダイモンジソウなどの花を観察しながら参加者と供に楽しいひと時を過ごすことができました。

蝶のよう? 蛾? 胡蝶蘭 (コチョウラン)

水戸市植物公園 木村 弥生

今回はフラワーギフトとして一年中使われる、華やかな洋ラン、コチョウランをご紹介します。

学名は Phalaenopsis (ファレノプシス)、ギリシャ語の Phalaina (蛾) と oopsis (見かけ) の2語を組み合わせて「蛾のようない」という意味合いになります。日本では蝶が舞っているように見えることから「胡蝶蘭」という名前が付けられました。



東南アジア原産で、高温多湿で風通しが良い環境を好みます。日本の冬は低温になるので温度管理に特に注意して育てます。

コチョウランについての園芸相談で時々お受けするのは、ギフト用の大鉢の中にポット苗が数鉢入っていて、花が終わった後の管理方法です。

まずは大まかな管理ですが、大鉢からポット苗を出して、花が終わった花茎を元から切ります。

置き場所が大変重要です。直射日光は苦手なので、室内ならレースのカーテン越しくらいの明るさで窓際がおすすめ。できる限り光合成ができるように日光にあてて株の充実を心がけます。

水やりは、鉢の中がしっかり乾くまで与えません。一度しっかり乾かす理由は、水が乾いていく過程で根の周りに空気を入り込ませて発根を促進させるためなどです。コチョウランは元々、樹の幹や岩に着生しているラン(着生ラン)なので、鉢の中がいつも湿っていると根腐れをしてしま



観賞大温室「花の滝」

ます。乾いている鉢と水やり後の鉢を持って、重さの違いで水の乾き具合がわかるようになると思います。

その他のご質問等は、水戸市植物公園の園芸相談にお気軽にお問い合わせください。

春のプレゼントは ガーベラとハナビシソウ

ガーベラ

キク科 ガーベラ属

種まき時期 春と秋
発芽温度 10℃前後
生育温度 10~20℃
開花時期 四季咲き性
(春と秋に多く開花)
耐暑性 強い
高さ 10~80cm
花色 赤・白・ピンク・オレンジ・黄・複色



十分な日照のある温暖な気候を好みます。日当たりが悪いと葉が茂るだけで花が咲きにくい性質があります。太い根が何本も地中深く伸びて育つので、庭植えは耕土が深く堆肥などの有機質の多い肥よくな土壌が適します。乾燥にも耐えますが、生育、開花には十分な水を必要とします。

ハナビシソウ

ケシ科 ハナビシソウ属 一年草

種まき時期 春と秋
発芽温度 15~20℃
生育温度 5~20℃
開花時期 4月~6月
耐暑性 普通
高さ 20~60cm
花色 黄・オレンジ
赤・ピンク・白



日当たりがよく乾燥した気候を好みます。日当たりと水はけのよいところでは、こぼれダネで自然に増えて毎年咲きます。冬期は-5℃くらいまでは耐えます。庭土に腐葉土等を混ぜて土壌改良しておけば、肥料は必要ありません。

花のボランティアだより

駅南さくら東公園バラ花壇



冬でもバラ花壇のお手入れは欠かせません。



子供達も今度はどんな花になるのか興味深々です



交番前花壇を植替え



配置はこんな感じかな？



少年の森花壇を植替え

令和7年度総会及び講習会のお知らせ

【総会】

日時 令和7年4月23日(水) 10時00分

場所 水戸市公園協会2階会議室

議題 令和6年度事業報告並びに決算報告について
令和7年度事業計画並びに予算(案)について

【講習会】 総会終了後(概ね10時45分予定)

「石鹸とトピアリー作り」

講師は、ハーブ友の会

鹿志村恵美子先生になります。

一般の方は材料費¥1,000で

ご参加いただけます。



会の動き (10月~3月)

10月14日(祝・月) 花の感謝祭参加

10月21日(月) 花をたずねる旅

10月29日(火) 令和6年度第1回理事会

11月7日(木) 正副会長会議⑤

12月2日(月) 花のサークル117号編集委員会①

正副会長会議⑥

12月26日(木) しめ飾り作り講習会

令和7年

1月16日(木) 正副会長会議⑦

2月3日(月) 花のサークル117号編集委員会②

2月26日(水) 花のサークル117号編集委員会③

3月6日(木) 正副会長会議⑧

3月14日(金) 会報誌と花のタネ袋詰め作業

3月19日(水) 令和6年度第2回理事会

編集後記

果樹園からの四季おりおり

椋崎 薫

毎朝、日の出前から歩き出し、軽い体操を取り入れ、健康のために散歩をしています。

「花のサークル」を見る前は前方100メートル先を見て、姿勢を正して歩くだけでしたが、今は路肩の野草の花が気になり足を止めることもあります。先日サワフタギらしい花に出会い、秋には宝石のような美しい実感動いたしました。美しく色づいた実は翌日の朝にはありません。小鳥たちがついでに、体内を通してサワフタギの適する場所に種を落とし、発芽するのでしょうか。

秋には野コギクの花や庭に咲く小ギクが気になります。野コギクは場所によっては白い花や青みがかかった花が見られ、庭の小ギクは白、赤、黄、紫など多種多彩です。寒に入っても植木の間で頑張っていて、いとおいしいです。朝の約一時間でも様々な植物の出会いがあり、一日を楽しくさせます。

さて仕事のこと、今は剪定作業の毎日で、作業を進める私は右手に剪定鋏、左手にノコギリを持ち、無意識に持ち替えながらの作業、そして実りの秋を想像しながらの作業です。

立春も越えた頃、梅の花の薫りが漂ってくるとアンズ、桃、ネクタリン、プラムと次々に咲き、ソメイヨシノの開花後2週間後には梨の花が品種ごとに咲き、それを追いかけるようにリンゴの花が一斉に咲き始めます。ひと息ついたところでブドウ、柿が咲いて果樹農家としては摘蕾、摘花、摘果と毎年収穫の喜びを夢見ながら働いています。

近年、夏の記録的な高温で、病気や害虫の異常発生により栽培が難しくなっており、ウイルス性の病気や外来種の害虫、キノコ菌による木が枯れてしまうことや収穫直前に落果してしまうことも起きています。暑さや虫の被害を少なくするために畑の草刈りを遅らせたり、前号で紹介のグリーンカーテンで園地を囲む方法で防ぎます。朝顔やカラスウリなど、つる性の雑草を利用して温度を下げることを試みています。雑草は外気温を下げる効果はあるようですが、同時に後処理は大変な作業が待っており、一日一日苦業の繰り返しですが、この合間の花のある暮らしが今は拠り所になっているのです。